



痛い病気・痛くない病気

副院長・総合診療科 荻澤 融司

病気には痛い病気と痛くない病気があります。痛みなどはっきりとした症状がある場合は多くの方が早期に病院を受診して診断と治療を積極的に受けられますが、痛くない病気は、例えば健康診断で異常を指摘されても医療機関を受診することがおっくうで治療の開始が遅れ大事になることがあります。

そこで皆様の健康管理の参考にさせていただければと考え、前回の総合診療科で診察する機会の多い「傷みのある病気」に続き、今回は「痛くない病気」についてまとめてみました。

② 痛みのない病気

① 頭部の病気

脳腫瘍は初期には症状を示さないこともあります。症状がないので様子を見るというわけにはいきません。ちょっとでもあやしければCTやMRIでチェックする必要があります。脳動脈瘤も頭痛などの症状を示さない場合もありますが、一定の大きさになると破裂の危険が増大するために血管内治療を含めた手術が必要になります。



② 胸部の病気



健診の胸部レントゲンで異常陰影を指摘されることがあります。痛みや咳などの症状はありません。古い肺炎の痕跡であることが多いのですが異常陰影が腫瘍の場合もありますので肺がんの否定のためCTで確認する必要があります。高齢者の場合は肺炎があっても咳もなく血液検査をしても病気の重症度の割にはデータが良かったりします。たばこが原因のCOPD（慢性閉塞性肺疾患）も痛みを伴うわけではなく、安静時から呼吸苦がある場合や労作時の息苦しさを感ずることが多いようです。

③ 腹部の病気

肝臓、膵臓や腎臓の腫瘍は初期には痛みや重大な異常を示さないことがほとんどです。他の病気の検査中に偶然発見される場合もあります。従って疑わしければ適切な画像診断でチェックする必要があります。健診の胃のバリウム検査で異常を指摘されたら痛みなどの症状がなくとも胃カメラで確認する必要があります。早期癌ならば根治の可能性が大きいので、おっくうがらずにきちんと検査を受けて下さい。胃に潰瘍や胃炎がなくても各種の胃症状を訴えることがあります。Functional dyspepsia（機能性ディスぺプシア）といって各種の胃関連の症状、例えばみぞおちの痛みや不快感、胃もたれなどを示します。胃カメラを行い胃に病変がないことを確認した後には内服治療を行います。



④ 四肢の病気

いずれも健診で指摘される病気です。高尿酸血症だけが痛風の形で痛みを伴うことがありますが、その他はどの病気も痛みはありません。脂肪肝は減量で軽快するので体重を減らすように指導するのですが、ダイエットが一番難しいかもしれません。高尿酸血症は痛風の原因で、症状が出ると痛いので薬を飲むことに抵抗はないことが多いようです。また高尿酸血症は痛風の原因になるだけでなく高血圧や心筋梗塞などの病気にも影響するので、しっかり治療して尿酸値を正常値以下に



（次頁につづく）